
恋姫†勇者

もち丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋勇者

【Nコード】

N5702M

【作者名】

もち丸

【あらすじ】

勝手気ままな勇者と恋姫がおりなす物語。

一度は世界を破滅から救った勇者は、乙女たちが活躍する外史の世界でどのように暮らしていくのか。

この話は、自由な勇者に恋姫たちが振り回されるお話です。

注意…勇者は最終的に最強系に限りなく近くなるのでご注意ください。

作者はコメディーに走る傾向があります。

00 プロローグ的なもの

焦土と化した戦場。

あたりは、見るも無残なほどに荒れ、生き物の息吹を感じることもできない。

人々は突如現れわれた、魔物に怯え自由に外を出歩くことも出来ずに暮らす日々。

その魔物達の頂点に君臨するものが住んでいるという場所。

ここは、魔王城。

悪の権現ともいえる魔王が君臨するこの魔王城に、目に正義の心を宿した4人の若者たちの姿があった。

「一撃必殺 バーンインパクトオオオ」

強力な一撃を、その拳から繰り出す攻撃のかなめ、戦士、

「そろそろ、くたばりなさい。」

宇宙魔法 七つの星の裁かれよ 七星剣 グラン・シャリオ」

知識を極め、あらゆる魔法をあやつる、魔道士、

「まだよ、まだ私たちは負けられないの！

弾幕の嵐に苦しみなさい ジャツジメント・ショット」

援護のスペシャリストともいえる弓使い、エルフ、

数々の困難を打ち破り此処までやってきた彼ら。

数々の村を、人を救ってきた彼ら。

そして、遂に彼らはここ魔王城に辿りついた。

しかし、そんな彼らでも苦戦するほどに魔王の力は脅威であった。魔王から放たれる攻撃の一つ一つが一撃でも貫くと戦闘不能に陥るほどの破壊力が込められていたのだ。だが、そんな状況でも彼らは渾身の力を振り絞って魔王を倒して明日を手に入れるために抗い続けた。

戦士は、魔王の攻撃に怯むことなく拳をふるい、体中に傷を負い。魔道士は、先ほどの一撃に精神力を使い果たし立っているのが限界の状態。

エルフは、襲い来る魔王の攻撃から仲間を守るためのバリアーに力を注いだ。

明日をつかむために、足掻いた彼らの力により、あの無敵だと言われた魔王を確実に追い詰め、両者はすでに気力だけで戦場に立っていた。

そして、仲間たちの全力をかけた攻撃に心を熱くたぎらせた、一人の一際眩しい目をした青年がこの戦いを終わらせるために前へと踏み出す。

「ついにここまで追い詰めたぜ、魔王。」

俺たちの未来を、お前なんか消されてたまるかよお！

次の一撃に俺のすべてを、みんなの夢を、未来への希望をかけてやる！！」

彼は、闇を切り裂く光の戦士、勇者、

遂にすべての負の連鎖を終わらせるための人類の存続をかける最後の力を振り絞った攻撃が、勇者の光り輝く拳から魔王へと放たれた。

『くらいやがれええ!! ‘封印の壺’』

「「「……………え??’」」」

こうして世界は救われた。



魔王城‘宝物庫’

「おっ宝、おっ宝 ざっくざく!! いえい」

鼻歌まじりで、うきうきしながら魔王城の宝物庫を笑顔で駆ける青年。

先ほど魔王にとどめを刺した勇者である。

「おおお、すげー。

なんだこの鏡、ガラスじゃねえなー液体で出来てんのか??’」

さすがは、大陸を納めていた魔王の宝物庫。

とても高そうな物から、ようともわからないようなもの珍しい物と山のように築きあげられている。

勇者が嬉しそうに不思議な鏡をぺたぺたと触っていると、背後から赤いローブを身にまとった魔道士の少女が歪な笑みを顔に浮かべながら近づいてきた。

「なにしてんのよ、あんた!!」

ちよっとは反省したらどうなのよ?

魔王を‘封印の壺’で倒すなんて前代未聞よ」

「そりゃあたりまえだろ。」

魔王を倒したのは、俺らが初めてなんだからな」

「ああーもー、そういう意味じゃないわよバカ」

少女の声など聞こえないとばかりに、鏡を調べる勇者。

一方、少女のほうは、「お父様になんて言えばいいのよ」とあたまを抱えている。

先ほどから話に上がっている封印の壺の説明をしておく。

封印の壺…HPが5%以下になった魔物を封印できるというアイテムまた、このアイテムは各家庭にひとつはあり、子供が外に遊びに行くときに、用心して持っていくようなアイテムのことである。

基本的には、スライムをはじめとした初期の魔物に使われるものである。

「もーいいわ。」

方法はどうであれ、魔王をたおせたんだものウジウジするのも、あたしらしくないわ」

どうやら少女は、無理やり納得したようだ。

「でも、あんたいつまでコソ泥みたいなことやってんのよ？
世界を救った勇者がそんなことして、恥ずかしくないの？」

「恥ずかしくなんかねえよ。」

それよか人の家に入ってタンスの中調べるほうが100万倍恥ずか
しかったね」

「……っつ／＼」

そっそれはいいのよ。

お父様が認めて下ってるのだから」

ばつが悪くなったのか少女は勇者から視線を外した。

簡単に説明すると、この国では勇者一行が一般家庭からものを拝借
する行為は、国王の権限により正当化されているのである。

国王いわく、「勇者は我々のために命を張っているのだから協力し
たまえ」ということらしい。

不条理極まりない。

「そんなに怒るなよ、んなことより見てみるよこの鏡。

国王とか貴族に売りつけたら、絶対高く売れるぞ」

1mほどある鏡を持ち運ぼうと勇者がしゃがんだその時……

突然、鏡が青白く光り輝き、その光が勇者を飲み込んだ。

「きゃっ！！」

また、なにしたのよあんた？？

………って、え？」

少女が、視線を光を放った鏡の方にむけると

そこに、勇者の姿を見つけたことはできなかつた。

こうして、世界を救った一人の勇者はなにかに導かれるようにして
世界をわたった。

00 プロローグ的なもの（後書き）

まずは、読んでくれてありがとうございます。
こんな感じの勇者の冒険です。
完結できるようにがんばります。
では、次回もお楽しみください。

01 物語の始まりは大体こんな感じ？

ああ……………ねみい

ってか、すげー頭がグラグラするんですけど。

なんつーか、二日酔いって感じじゃなくて、ルーラを初めて使ったときの無重力感に五臓六腑を徹底的にやられたって感じ？

「兄貴ー、こっちに来てくたせえ」

ああ……………だるー

起きなきゃダメかな？

俺的には、このまま寝ときたいんだけど……

「なんだーチビー？お宝でも見つけたか？」

「お宝ではないですが、男を見つけやした」

ほら、あれじゃん。

体調を万全にしとくのも勇者たるものの務めってやつでしょ。

「ん？なんだこの男？こんなところで寝込みやがって、馬鹿か？」

「それにしても、この男、珍しい衣を着てやすね兄貴。

どっかのお偉いさまですかね？」

「そんなのかんけーないんだな。」

男だから金になるもの剥がしたら、ばらすんだな」

つよし、決めたぜ。

とりあえず寝てから、考えよう！！

「そうだ、デクの言うとうりだ。」

どこのお偉いさまか知らねえけど、こんなところで寝ているやつが悪
いんだよ。

そうと決ったら、チビ・デクやつちまえ!!」

「了解＞なんだなく、兄貴」

『つて、うるせええええええええええー！！！！』

「ひよえええーうっ動いたー！！！！」

人が眠ろうつて時に、隣でギャーギャー騒いでんじゃねえよ。

そうイライラしながら俺は、
 気だるい体に気合を込めた。

そうして、目を開くいて俺の目に飛び込んできたものは……見渡すばかりの荒野と、3人の黄色い布をからだに身に付けた雑魚キヤラのオーラを溢れんばかりに出している男たちが、小振りの青龍刀を片手に驚いた顔をしている姿だった。

「おっおい、てめえ急に起きてんじゃねえぞ」

「そうだそうだ」

「そっそうなんだな」

なんだ、こいつら??

ってか、ここどこさ??

そういや、なんで俺こんなところで寝てたんだ??

.....うーん、さっぱりわかんね。

いくら考えても、俺の頭には疑問しか浮かんではこない。

「おい、そこのお前。」

びびってるとこ悪いがちょっと聞きたいことがあるんだがいいか?

考えていても、答えが出そうにないから俺は目の前にいる雑魚キヤラ集団のリーダーっぽい奴に話しかけることにした。

困った時は人に聞け、イベントを起こすための初めの一歩。

勇者の俺にとっちゃ朝飯前のことだぜ。

「お前だよ、お前。ひげ生やした真ん中のおーまーえ」

「おい、てめえ兄貴にむかって何だその態度は??」

「いや、あんたじゃねえよ。」

俺はひげのおっさんに聞いてんの、わかったかな? かな?」

しゃしゃりでてきた、小さい奴を軽く睨みつける。

「っう.....ちっちくしょ」

すると、兄貴と呼ばれた男に助けを求めるように目をそらした。

「んで、兄貴さんだっけ？」

あんた、ここがどこののか教えてくんない??」

「口のきき方を知らねえ奴だな。」

まーいい冥土の土産に教えてやるよ。

ここは、長安。董卓が納めている土地だ」

長安か……………

ぜんぜん、聞いたことない街だ。

というよりも、場所がわかったからといってどうする? って話なんだがな。

せめて、魔王城とか目立つ目印を教えてもらえねえとな。

……………ん?

……………魔王城?

「ああああああー!! 思い出したああああ」

「「「きやああああああー!!!!!!」」」

思い出した。

そうだ、確か俺は魔王を倒した後に宝物をあさってたら、高そうな不思議な鏡を見つけてからいろいろ弄ってたら突然、青白い光に包まれて意識を失ったんだ。

どー見ても、ここは俺の知らない土地だから、あの鏡は転移系のマジックアイテムだったのか??

でも、あの魔王が宝物庫に置いとくほどの物だからな。
ただのマジックアイテムじゃねえだろうしな。
うーくん、どうするよ？ 困ったもんだね。

「おっおい、てめえ！！」

さっきから急に大声あげてんじゃねえよ。

気味が悪い奴だ、おいチビ・デク！！もーいいやつちまえ」

「了解＞なんだなく、兄貴」

あーうるせえなあ。

また3人組が騒ぎ出してうるさくなってきたから注意？ しようとした瞬間、突然首のあたりに寒気が走ったので、おおきくバックスツテプをすると、さっきまで俺の首があった場所が、チビとかいう男の青龍刀で横一文字に薙ぎ払われていた。

っはあ？？

「っち、意外とすばっしこい奴だな」

俺の首を払えなかったことに、残念がる男。

しかし、俺の命を狙っているのは1人だけではない。

「スキありなんだな」

その巨体に似合わないスピードで襲いかかってくるのは、デクと呼ばれていたおおがらの男。

チビとは違い後ろに大きく青龍刀を振り上げると一気に俺めがけて振り下げてくるが、俺は、その強力ではあるが単調な攻撃を横にスウェーすることで避け、避けた勢いを保ったまま体制の崩れたデク

の腹めがけて足をふるう。

「ぐあああ」

聞くに堪えない、みすばらしいうめき声とともに膝をつくデク。

「おい、なんのつもりだお前ら」

攻撃を唯一仕掛けてこなっかた兄貴と呼ばれる男を睨みつける。

「なあーに、あんたがいい衣を着ているからよ。」

そいつをあんたから奪って金にしようと思ったただけなんだが、あんなかなかやるようじゃねえか」

なるほど。

物取りってやつか。

俺も、魔物相手に近いようなことはやってたが実際にやられると、気持ちいいもんじゃねえなこれは。

まあ、一撃で終わらせてやるかね。

情報を聞き出せないのは厳しいが命狙われてるから、しかたねえか。

恨むなら、喧嘩売った相手をまちつがた自分たちを恨むんだな。

そうして俺は、腰に付けていた剣を天に掲げる。

俺の周りの空気が一瞬にして変わったことに、顔色を悪くする3人組。

兄貴のやつは、逃げようとしているがもう遅い。

そこからどんなに逃げようと俺の射程距離からは逃げられない。

「覚悟しなよ、お前ら。」

勇者様の力見くびるんじゃないぞ！！ イオナズン！！！！！！！！！！」

.....

.....

.....

.....

..... あっあれー？

「イッイオナズン！！！！！！」

.....

.....

.....

…え？なんで？もしかしてMPがないとか？

なにも起きないことに、逃げようとしていた3人組も動揺してお互いの顔を見ているがそんなことはどうでもいい。

すげー恥ずかしいんですけど。

ちよー恥ずかしいんですけどおおおおお。

原因を探るために、恥ずかしさをこらえて自分にマジックアイテム
《スペクトルズ》をつかった。

すると、そこには……………

名前 アルス・クローディア

LV 13

職業 元・勇者

現・放浪者

HP 56／56

MP 24／24

装備 鋼の剣

アクセサリ empty

どういうことだよこれ??

なんなのさ??

WHAT?? WHY??

魔王の最後の呪いなのか、鏡のせいなのか??

LVが12ってなんの嫌がらせだよ!!

魔王倒すためにLV92まで上げた俺の努力はどうなのさ??

鏡を渡る代償がLV80だなんてわりにあわなすぎだよね!!

そりゃ、イオナズン使えないはずだよな!!

つかえんのかってメラ・ヒャドくらいか??

知らねえよおおおお!!

そんでもってエクスカリバーどこいったー!!

なんで鋼の剣にかわっちゃってんのさ??

しかも元・勇者って、現・放浪者とかになってるし!!

もー突っ込みどころ多すぎてやってらんねーよ!!!!!!!!!!!!!!

「きゃははははは!! イオナズンだってよー

なんも起きねえじゃねえかよ、ビビらせてくれるなよ!!」

「へへへへへへ、イオナズン!!」

「ばかなんだなー」

うぜー。

人の一大事って時に、指さして笑ってんじゃねえーよ。

「ちょっと、黙っとけ ヒャド」

呪文を唱えた次も瞬間、そこには指をさして笑っている3人の男の氷の像ができていた。

「うーやっぱ、MP減ったせいでかなりキツイぜ。

とりあえずは、街に行って情報集めがてらに回復しねえとな。

長安とか言ってたな、まずはそこにいくとしましょか」

こいつらは……………うん、大丈夫だな。

なんか、どうにかかなりそうな感じだし。

よし、そんじゃ行きますか。

そうして、男たちが乗っていたと思われる馬にまたがると、カンダけを頼りに長安目指して荒野を駆け抜けていった。

その後の3人組

「あつ兄貴!! どうしますか??」

「おなか減ったんだな」

「うっうるせー自分でどうにかしやがれ!!」

あの野郎、何にものだったんだよ

「きつと五胡の妖術使いだったんだな」

「妖術使いかなんだか知らねえが、俺らの馬を返しやがれ」

「「「ぶえっくしゅん」」」

「あーさみいな」

「さむいですね、兄貴」

「さむいんだな」

すでに、空には満天の星がちりばめられていた。

「兄貴ー!! 宿屋がみえますぜー!!!!!!」

「おーーでかしたチビ!!」

「よくやったんだな」

なんだかんだで悪運は強い3人組のようだった。

01 物語の始まりは大体こんな感じ？（後書き）

はい、どうにか書き終わりました。
まずここでお礼をしたいと思います。

《ケイタさん》

感想ありがとうございました。

作者にとって新ジャンルの挑戦なので感想でほめてもらえて、うれしかったです。

それでは今回はここまでということで。

次回予告

長安に立ち込める言い知れぬ暗雲。

それに呼応するように肥大する人々の不安。

しかし、暗雲に立ち向かうひとつの影があった。

次回《立ち上がれ 月レンジャー》

次回もお楽しみに！！

注…次回予告は実現できない可能性が高いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5702m/>

恋姫†勇者

2010年10月10日21時41分発行